栗田梨津子著

『新自由主義時代のオーストラリア多文化社会と市民意識

――差異を超えた新たなつながりに向けて』

評者：塩原　良和

オーストラリアにおいて植民地期以来形成されてきた英国的白人性を中核とした白豪主義的なシティズンシップのあり方は，1970 年代に導入された多文化主義によって公式に否定された。1990 年代後半になると多文化主義への政治・社会的反動が顕在化したが，それは白豪主義への回帰を志向したわけでは必ずしもなかった。他の自由民主主義国家における 2000 年代の動向とも共通していたことだが，政策面における多文化主義の後退は「普遍的で」「リベラルな」体裁をまとった「オーストラリア的価値観」を旗印にした移民の社会統合の強化として進められた（塩原 2025）。それが新自由主義の台頭による，国民国家のすべての構成員に平等なメンバーシップ・権利・義務を想定するナショナルなシティズンシップ理念の弱体化と同時進行していたことも，多くの国家と共通していた。この「オーストラリア的価値観」によって正当化された新自由主義により，一方では歴史的に構造化されたレイシズムが個人化・隠蔽されることで既に不利な立場に置かれていた人種・エスニック集団がいっそう周縁化され，他方では自己責任規範に基づく改革によって白人貧困層がアンダークラスと見なされて排除されていった。

こうしたオーストラリアにおける新自由主義的な統治のもとで，「望ましくない市民」として周縁化されている集団（先住民，アフリカ人難民，白人貧困層）に属する人々の経験するシティズンシップとはどのようなものか。この問いを，人類学者である著者がアデレードおよびシドニー周辺における綿密なフィールドワークを通じて探究した成果が本書である。都市を舞台にしたマイノリティ集団間の交差的な関係性とアイデンティティのあり方，そこから創発する下からのシティズンシップ（市民意識）の現状と可能性について興味深い考察が本書の各章では展開されている。まず序論で問題意識や研究背景などが説明され，第 1 章では人類学・社会学における多文化社会・シティズンシップに関する先行研究の整理と，そこにおける本書の位置づけが示される。新自由主義の影響下にある国民社会では，多文化主義的な「差異化された」シティズンシップに対して新自由主義の自己統治的なシティズンシップ規範が優勢となり，後者への順応の度合いに応じて人々は分断されつつ社会に組み込まれる。しかしこうした国家と市民間の垂直的で法的なシティズンシップと同時に，分断され排除された人々のあいだの水平的なシティズンシップも形成される。さらに本書の検討対象である先住民，アフリカ人難民，白人貧困層という 3 つの集団は，不確実な時代における安定した構造からの切り離しや疎外感としての「転位／居場所のなさ（displacement）」の経験を共有している。

第 2 章では，オーストラリア連邦結成から今日までのメディアや政治家による「オーストラリア人性」「非オーストラリア人性」をめぐる言説が考察される。2000 年代半ばから活発化した「価値をめぐる論争」のなかで連邦政府が定式化した「オーストラリア的価値観」は，

「普遍的」であると同時に白人性／西洋由来であるとされた。その結果，建国当初からの「望ましくない市民」のイメージとしての「非白人」性が温存されることになった。それに加え，新自由主義の優勢な状況においては自律性，道徳性，合理性を欠いた行動様式も「非オーストラリア的」と表象される傾向が強まった。その一方で，とりわけコロナ禍のさなかでは，そうした偏狭なナショナリズムや排外主義こそ「非オーストラリア的」だと非難する，より包摂的な「望ましい市民」のイメージもしばしば提示されていた。

第３章では，新自由主義のもとで先住民が規範から逸脱した存在として他者化されるプロセスと，それへの先住民の対応が考察される。オーストラリア大陸への白人の入植以来，今日に至るまで，先住民の黒人性は人種的に劣等なものとして有徴化され続けている。それに加えて近年では，先住民独自の文化実践や行動様式が新自由主義的規範からの逸脱とみなされ，行政による介入の対象になってきた。それに対して都市の先住民のなかには，多様な自己同一化のあり方をもち新自由主義的規範を一定程度受け入れつつも，政府の介入政策から距離を置くための戦略として自らの先住民性を強調する者もいる。

オーストラリアの文脈における黒人性は歴史的には先住民性を意味してきたが，近年ではアフリカからやってくる難民も増加している。第４章では，現代オーストラリアにおいて黒人性を有徴化されたもうひとつの集団であるアフリカ人難民の帰属意識が検討される。黒人性に付与された暴力性や犯罪者性などの否定的なステレオタイプは，アフリカ人難民の主流社会への統合を阻む要因となっている。また彼・彼女たちを支援する白人のキリスト教会関係者が，アフリカ人の文化的価値観や行動様式が新自由主義的規範から逸脱していると見なし，その変容を促す事例もあった。それに対して，アフリカ人難民たちは白人からの支援を得るために脆弱な「難民」のイメージを自己呈示しつつも，自立に向けた交渉を行い，ときには黒人性に依拠した先住民との連帯を模索することもあった。

第５章では，オーストラリアにおけるマジョリティ性である白人性を有していながら，新自由主義的規範によってスティグマ化され「望ましくない市民」として排除された白人貧困層の帰属意識のあり方に焦点が当てられる。福祉給付金を受ける白人は，自己管理能力を欠いているがゆえに白人中産階級にとってのコストやリスクであると見なされ，行政によって生活習慣や行動様式への介入を受けることもあった。それに対して白人貧困層のなかには，同様の境遇にある他の白人と連帯して権利主張や不当な福祉的介入への異議申し立てをし，それを通じて白人貧困層としてのコミュニティ意識を涵養する人々もいた。また白人貧困層は排外主義的ナショナリズムや反多文化主義に陥りやすいという通説とは異なり，先住民貧困層とのあいだで階層やローカリティに依拠する相互扶助が形成される例も観察された。

周縁化された集団どうしのこうした交差的なコミュニティ形成や水平的なシティズンシップのあり方は，第６章でさらに詳しく考察される。先住民，アフリカ人難民，白人貧困層といった集団のあいだには，社会的排除という共通の経験を基盤にした，ケアの倫理に基づく暫定的で緩やかな共通意識が形成されることがある。またインターネット空間においては，社会的不公正への怒りや悲しみといった情緒的連帯を基盤とした，社会正義を求めるコスモポリタンなシティズンシップが構築されることもある。こうした「下からの」市民意識としてのシティズンシップは，「上からの」統治としての

新自由主義的シティズンシップとは別の帰属のあり方を示唆している。

結論では各章での知見を整理しつつ，オーストラリアにおける新自由主義的統治と，それに対するオルタナティブとしての交差的なコミュニティやシティズンシップのあり方が総括的に検討される。新自由主義の影響のもとでは，自己責任によって自己を統治できない人々は「非オーストラリア的」な「望ましくない市民」として表象される。それは一見すると「普遍的」な価値観を標榜しつつ，根強く残存するレイシズムを隠蔽することで先住民や非白人といった人種的他者の排除を可能にする。それに対して先住民やアフリカ人難民は，自身に付与された黒人性や難民性を再解釈し呈示することでレイシズムに対峙しようとするが，それと同時に新自由主義的な自己責任規範も内面化し，自身の苦境を自分自身や自分たちの集団の「怠慢さ」や「努力不足」に起因するものとみなす傾向もある。

この自己責任規範によるスティグマ化は，白人貧困層にとっては白人としての優位性の剝奪を意味する。それは本書でも参照されているガッサン・ハージ（2003）の議論が指摘したような，英国系白人の衰退の言説と排外主義的ナショナリズムを強化する方向にも働きうる。しかし本書では，それとは別様の可能性が示される。すなわち「先住民性」「難民性」「白人性」といったカテゴリーに収まりきらない，交差的な帰属意識とネットワークの形成である。先住民とアフリカ人難民のあいだでは，植民地主義とそれに由来する社会的不公正の経験の共有が，そして彼・彼女らと白人貧困層とのあいだでは，新自由主義的統治による排除という「居場所のなさ（displacement）」の感覚の共有が，緩やかな関係性と連帯の契機となっている。それは貧困と主流社会からの排除という苦悩を分かちあい，日常的な気遣いや相互扶助を実践するケアの倫理であり，不確実な時代を生き抜くための，集団の境界を越えたコンヴィヴィアルな集合性と「根を張った」コスモポリタンなシティズンシップの可能性をもたらすものである。本書におけるこうした知見から得られる，多文化社会化が進行する日本におけるマイノリティへのレイシズムや社会的排除に対処するうえでの示唆が結論の最後では述べられている。

オーストラリアにおける新自由主義的統治の進行とそれがもたらすシティズンシップの分断という本書の主題は，筆者も参照している関根政美（関根ほか編著 2020）や評者自身（塩原 2017）によって問題提起されていた。しかし従来の研究は理論的示唆あるいは政策分析に留まり，そうしたシティズンシップの分断が周縁化された人々によって実際にどう経験されてきたのかを検証した研究は少なかった。それゆえ本書は継続的で綿密なフィールドワークによって，こうした人々にとっての新自由主義的な統治とシティズンシップの経験を記述した貴重な実証研究である。しかも筆者はひとつのカテゴリーの集団のみに注目するのではなく，複数の集団間の交差性と関係性を調査・分析している。それにより，ひとつの集団だけに注目していたのでは見えてこなかったであろう，研究者が従来囚われがちであった固定観念を問い直す発見，すなわち金菱清のいう「ブラックスワン」（金菱 2024）を見つけ出すことに成功している。それはたとえば，先住民としての黒人性とアフリカ系移民としての黒人性の接合可能性であり，白人貧困層の白人性からの排除が非白人への排外主義に帰結せず，非白人貧困層との連帯に向かう可能性である。こうした発見は，異なる集団のあいだに成立するケアの倫理にもとづくコンヴィヴィアルでコスモポリタンなシティズンシップの可能性という，筆者が展望す

るオルタナティブに一定の説得力を与えている。

本書が批判している新自由主義をはじめ，排外主義的ナショナリズムや経済成長至上主義といった私たちが生きる時代における支配的なイデオロギーは，私たちをいまそうであるリアリティのなかに押しとどめ，ありうべき別のリアリティへの想像力を奪おうとする。そうした支配的現実に対峙して，いまとは異なる別のリアリティが現に存在することを示すのが，人類学や社会学の今日的役割のひとつである（ハージ 2022）。本書は地に足をつけた地道なフィールドワークから，そうしたオルタナティブへの展望を示した貴重な業績である。

（栗田梨津子著『新自由主義時代のオーストラリア多文化社会と市民意識――差異を超えた新たなつながりに向けて』法律文化社，2024 年 7 月，ⅱ＋226 頁，定価：本体 5,000 円＋税）

（しおばら・よしかず　慶応義塾大学法学部教授）

【引用文献】

金菱清（2024）『フィールドワークってなんだろう』筑摩書房

塩原良和（2017）『分断するコミュニティ――オーストラリアの移民・先住民族政策』法政大学出版局

塩原良和（2025）『共生の思考法――異なる現実が重なりあうところから』明石書店

関根政美ほか編著（2020）『オーストラリア多文化社会論――移民・難民・先住民族との共生をめざして』法律文化社

ハージ，ガッサン（保苅実・塩原良和訳）（2003）『ホワイト・ネイション――ネオ・ナショナリズム批判』平凡社

ハージ，ガッサン（塩原良和・川端浩平監訳）（2022）『オルター・ポリティクス――批判的人類学とラディカルな想像力』明石書店